

二〇〇〇年二月四日

電話して消息を確かめたりしなくても、大丈夫なのを友人といふのだが、久しぶりに仙台の結城登美雄、東京藤塚光政に電話してみた。案の定、別に変りはないの素気ない応答だ。あんまりお variability だろから友人なのであって、考え方生き方共に時々お variability がある方はやっぱり友人としては遠慮させて頂くしか無いのだが、それにしても二人共に微動だにしないところが凄惨である。

結城藤塚共に福相で人徳大の呼び声高いが、こうまで人が変らぬと、それはすでに人格者の域を越えて、第一次風狂の人の世界に突入している。結城に問えば、今は日々の七割は仕事で旅に出ていると言う。宮本常一の足跡を年をとってから追いついた結城の面目躍如たるものがある。

「やっぱり日本はもうどうあがいても駄目です。全て手遅れです。それを知らせても意味がありません。唐桑の和則が町長選に出馬すると表明してしまいました。今さら、もう手遅れなんです。ジタバタしない方が良いのです。」明るい虚空地蔵の笑いと共に結城は断言する。他の人間がこんな科白を吐いたなら、私はそれをたしなめるだろうが、結城がそう言うのを私は楽しむ事が

できる。私だって、結城ほどではないが、あちこち渡り歩いて、もう駄目だろうな位の実感を持つ身だ。ただ、駄目な中で同じように駄目になっていく自分が許せないから、ジタバタしてみるだけの事なのだ。ジタバタする演技こそが日々の仕事になっているだけのことだ。

結城の「山の暮らし海の暮らし」\*注 はそれでも変りようのない彼の視点の柔らかさが光っていた。もう駄目な日本の山村、漁村の、それでもそこに暮らさざるを得ぬ常民の生物としての尊厳が描かれていた。生物としての尊厳とは決定的な狡猾さのようなものだ。山の村も、海の村もその品格心性共に破滅した。しかし、そこに暮す人間たちの生物的狡猾さは強い、時に愛すべきものさえある。それが結城が言いたかったことの要約である。

わたし達はすでにそのような生物的狡猾さ、わたし達の中に生き残っているネガティブな狡猾さに頼るしかない。

北海道十勝のヘレンケラー記念塔の建設現場へは来週にもでかけてみよう。今週、九、十両日は川口市に建設中だった増井さんの家と事務所のオープンハウスだ。何とか工事が間に合えば良いのだが。

支援センターへの注文も少しづつ増えてきているようだから、荷作りを始めなければならぬ。カンボジアの洪井さんから「ひろしまハウス」工事現場の写真が送られてきた。暮れには建設資金を持ってブロンペンにでかけなければならぬ。松崎町の倉ギヤラリーの次回の展示のための作品も考えなければならぬ。ジタバタの音が足許に在る。